

兵庫県「山田錦」産地の土壌の特徴

「山田錦」の生産振興及びブランド力の強化に向けて栽培環境を明らかにするため、北播磨地域の栽培田の土壌調査を行った。その結果、土層が深く粘質な湿田が多かった。また主要産地である三木市と旧東条町には、交換性塩基が多く土壌pHが高い圃場が多かった。

内容

2010～2011年度に、北播磨地域の「山田錦」栽培田、計61圃場の土壌調査を行った。その結果、有効土層（れき礫層等がなく、根が伸長しうる土層）が深く、非灌が^{かん}い期（11～12月）にもグライ層（青灰色の還元層）が認められる湿田が多く、湿田の多くは「山田錦」の栽培に適した粘質土壌であった（図1）。また三木市と旧東条町には、交換性塩基、特に苦土（MgO）が40～120mg/100g前後と多く（図2）、pHも6.5～7.5前後と高い圃場が多かった（図3）。当地には一部の母材に苦土を含む神戸層群が露出しており、地質的な影響も考えられた。水田における交換性塩基含量の一般的な目標値、石灰（CaO）200～250mg、苦土25～35mg/100gに比して値は高いものの、塩基バランスを示す石灰/苦土の当量比はほぼ3～6の適正範囲にあった（図3）。なお、可給態リン酸や交換性カリ、腐植には、主要産地を含まないずれの調査地域とも大きな不足は認められなかった（データ略）。

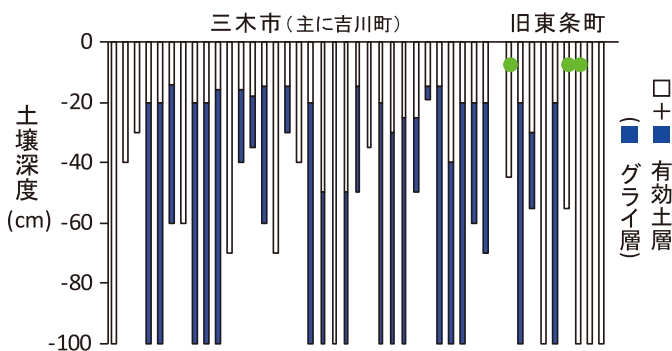


図1 有効土層と非灌がい期のグライ層（主要産地）

●を付した3圃場のみ、作土：壤質、下層土：粘質。
それ以外の圃場は作土（表層約15cm）、下層土とも粘質。

今後の方針

県産酒米の差別化や収量・品質の向上に向け、引き続き、調査結果の活用を図る。

本研究は農水省実用技術開発事業「酒米の酒造適性に及ぼす高温障害を抑制する最適作期決定システムと水管理技術の開発」（2010～2012）において実施した。

大塩 哲視（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2414）

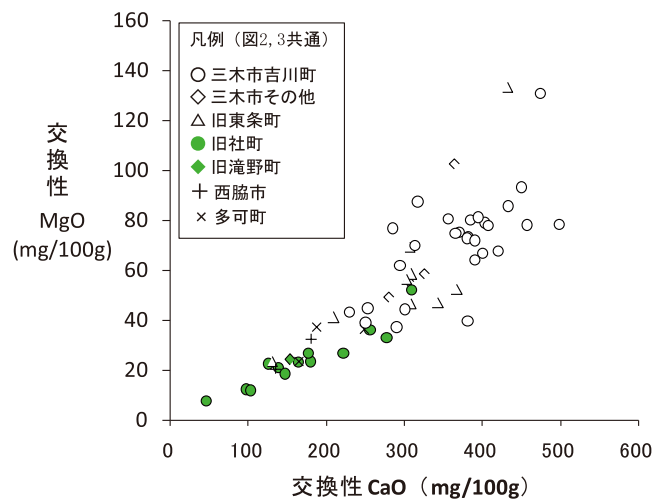


図2 作土の交換性石灰、苦土含量の分布

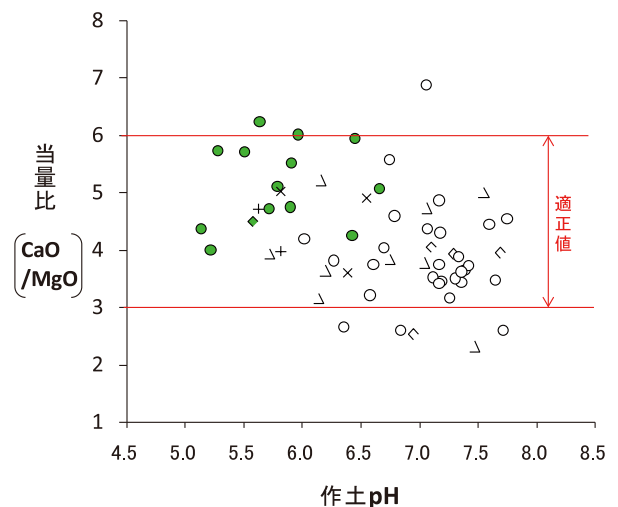


図3 作土の塩基バランスとpHの分布